都会の人に訴え

東京・銀座で自殺予防交流会

十和田などから250人参加

「な（あなた）もわ（わたし）もけやぐ（仲間）もみんなで自殺予防の輪」をテーマに、自殺予防活動に取り組む団体や人たちの交流会が31日、東京・銀座で開かれた。県内からは十和田市や七戸町のボランティア団体やつがる市の保健師、青森市の障害者の人たちが参加し、都会の人たちに向けて、生きることの大切さ、地域に住む人同士が悩みや気持ちを伝え合う大切さを伝えた。

交流会には、ボランティア団体の人たちに加え、来場した市民らも合わせて約250人が集まった。

交流会の中であったシンポジウムに、青森市のボランティア団体「なみおかSSC」に加わり、自殺予防活動にかかわる阿部尚明さん(27)が発言者の一人として参加した。秋田県鹿角市に住み、筋ジストロフィー患者で体が不自由な阿部さんは、車いすを押してもらい移動する。大きな声が出せない。母と二人暮らしという阿部さんは「自分でできることはわずかだけれど、自分は母の支えになっている。僕の命は、自分ひとりの命ではない」と述べ、「たくさんの人とかかわることが、自殺予防につながる」と語った。

つがる市で自殺予防活動に取り組む保健師、小山真貴子さんもシンポジウムで発言。同市で07年は自殺者数が減ったことに触れ、「活動の手をゆるめた市町村では自殺者が増えたという話を聞く。継続することが必要」と述べた。

活動発表では、十和田市のボランティア団体「こころの会」が、自作の紙芝居「とわだ山の風」を披露。肉親を亡くして寂しさに沈み込む家族が、仲間や家族に支えられ、少しずつ自分を取り戻す様子を盛り込み、「考え込まず、心も体も息抜きしよう」と訴えかけた。

また、七戸町からは、各地区から推薦され、行政と住民の橋渡し役となっている「保健協力員協議会」のメンバーが、「こころの健康」の大切さを題材にした健康劇を上演した。

アトラクションでは、「なみおかSSC」の田中健史さん(27)がシンガー・ソングライター「TAKeSHI」の名で登場。筋ジストロフィー患者で、車いすに乗り、人工呼吸器をつけた田中さんが、伴奏に合わせ、「すり減った靴底」「青春の旋律」を歌うと、会場からは大きな拍手が起こった。

活動紹介では、県内から七戸町保健協力員協議会の「劇団なごみ」が、こころの健康を題材にした劇を披露した＝東京・銀座の時事通信ホール